



平所埴輪窯跡（松江市矢田町）
松江道路の矢田町内陸工業団地入口付近にあった。ここで焼かれた「見返りの鹿」や馬、家などの埴輪はすばらしい造形で、国の重要文化財に指定されている。

池の奥4号窯跡（松江市大井町）
大井町の工業団地造成に伴い発見された。古墳時代後期のもので、10m以上ある。大井町は、須恵器を作る技術が島根県に伝わって以来、生産の中心地だった。



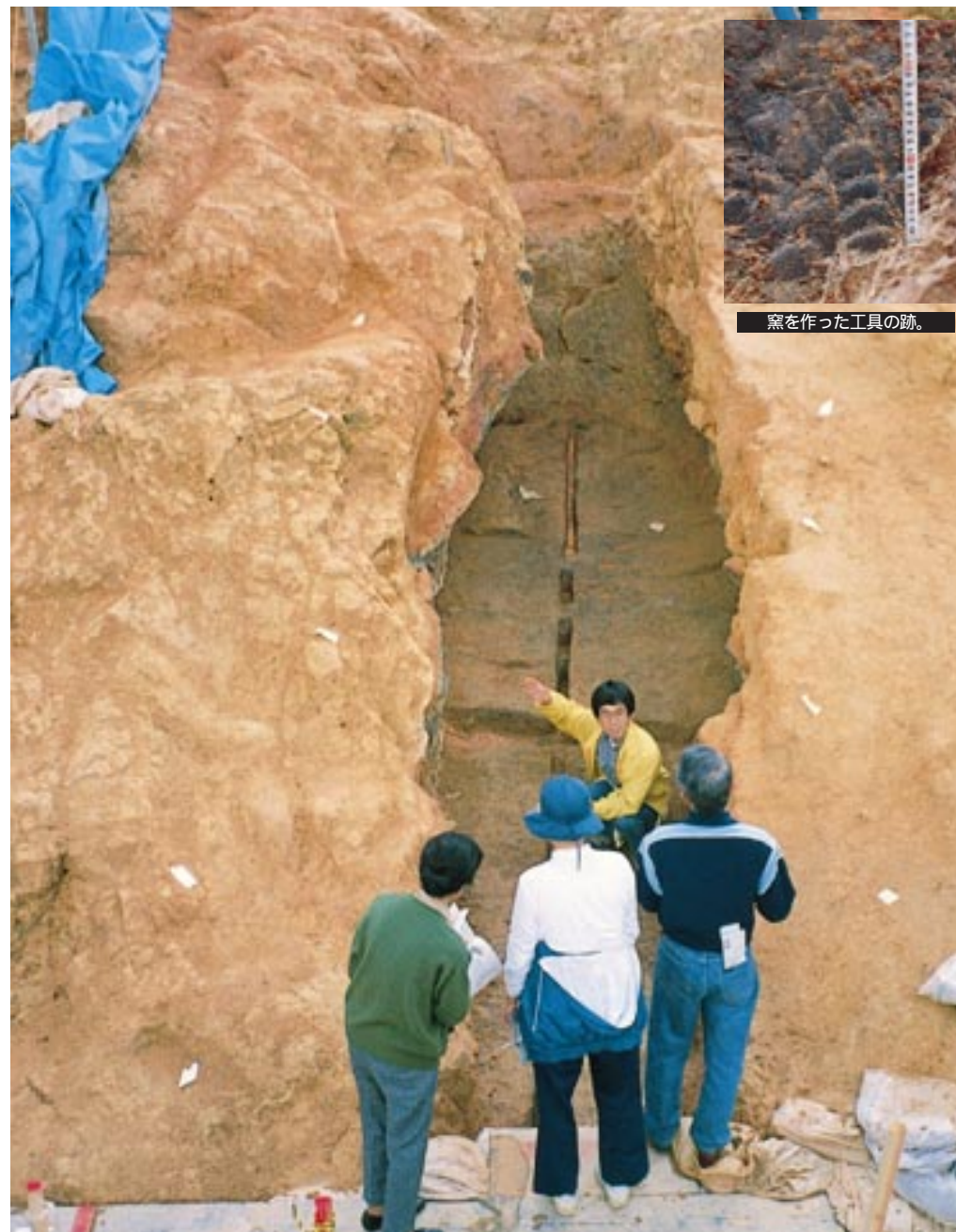
重富窯跡（旭町重富）
奈良時代、おもに瓦を焼いていた。近くにある重富廃寺の瓦を焼いていたと思われる。浜田自動車道建設に伴い調査された。



本片子窯跡（益田市遠田町）
奈良時代の須恵器や瓦を焼いていた。遠田町の農地造成で発掘された。



久本奥窯跡（江津市嘉久志町）
江津道路建設に伴い調査された。奈良時代の瓦やしび（寺の屋根の両側にある飾り）須恵器を焼いており、近くでは作業場も見つかった。「石州瓦の起源ここにあり」である。



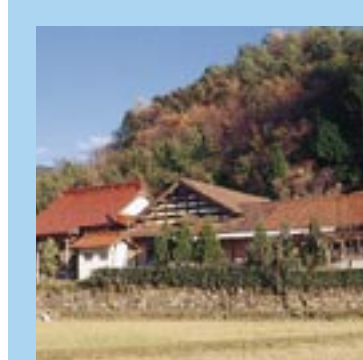
窯を作った工具の跡。

古代の焼物職人に迫る
発掘調査された窯跡…

縄文時代から弥生時代を経て古墳時代初めにかけて（約二万年前から一五〇〇年前）は、土器は野焼きで焼かれています。ところが五世紀になると、大陸から最先端の焼き物を焼く技術が伝わります。ロクロで形を作り、斜面に作った登り窯で焼くというもので、こうしてできたのが「須恵器」です（詳しくは四巻を参照）。

島根県では、五世紀の終りごろに須恵器が焼かれ始め、一〇世紀まで続きました。同じ形の窯では埴輪や寺の屋根に書く瓦も焼かれました。

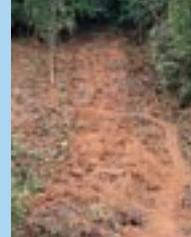
窯は山の斜面にひっそりとあることが多く、調査中に突然見つかったりします。近年、窯の発掘例はかなり増えてきました。これらの窯は専門の工人によって使われたものと考えられ、古代の手工業生産を考えるうえで貴重な資料となっています。



新しい石州瓦と古い石州瓦
慈光寺（江津市跡市）
石見地方では、発掘された窯と同時代（江戸時代の後期）に作られた石州瓦が、今でも古い家や寺などで使われている。新しい瓦は鮮やかな赤色がそろうているが、古い瓦は色がくすんで一様でなく趣がある。この慈光寺の庫裡の瓦は文化8年（1811）に葺かれたものだという。



相生遺跡全景（中央が窯跡、右側に建物跡）



生湯遺跡
（窯の左側が物原）



相生窯跡の内部（益田市市原町）
レンガを積んで部屋を区切っている。レンガの間に開けられたすき間を炎が通っていく。

発掘された石見焼・石州瓦

今でも石見地方の主要産業として全国に出荷されている石州瓦は、伝統技術として人びとに親しまれてきた。石見焼は、少なくとも江戸時代後半にまでさかのぼるこれらの焼き物について、近年の発掘調査で多くのことが明らかになってきました。

益田市の石見空港建設に伴う調査で、浜田市の生湯遺跡、江津市の三浦遺跡などは、「連房式登り窯」と呼ばれる斜面に段状に部屋をたくさん作って瓦や器を焼く窯の調査が進められています。



割目を粘土で補修。指の跡も見える。



煙道から見た窯。



灰が溶けてガラス状になっている。

山陰最古の窯跡（安来市門生山根1号窯跡）
安来道路建設に伴い調査された門生山根1号窯跡は、まれに見る残りの良い窯跡で、古代の窯焼きのさまざまな技術がわかってきた。

窯は、急な斜面をトンネルのようにくり貫いて作っている。壁は何度も焼かれてカチカチに固くなり、崩れた壁は粘土を貼って補修を繰り返している。床は、何度も焼くと失敗品が貼り付いたりするので、壊しては砂などを敷いていたようだ。

トンネルの先には、煙を出すための穴が上に向かって開けてある。これを「煙道」と言い、途中に段があったり溝がつながっていたりと複雑な構造をしている。単に煙を追い出すだけでなく、炎や温度の調節などもここで行われたのだろう。窯焼き技術のコツは、この煙道操作にあったようだ。

窯からは多くの須恵器が出てきた。同じ種類の須恵器でもよく見ると微妙に形や作り方が違うものがあり、時間が経つに従って、少しずつ変化していく様子がわかる。この変化を調べて、作られた時代を決めるものさしをつくっていく。

この窯は5世紀終りごろのもので、島根県でも最古級の須恵器を焼いた窯と考えられている。当時の先進地、近畿地方から職人がやって来て作った窯かもしれない。

